

Cross Cloth - 新井淳一の世界展
2006年1月7日～2月12日／調布市文化会館たづくり

テキスタイルの伝統とテクノロジーを融合させ既成概念を覆す布づくりを続けてきたテキスタイルプランナー新井淳一さん（TDA名誉会員）。武蔵野の面影が残る東京・調布市の文化コミュニティ振興財団設立10周年を記念し「新井淳一の世界展」が開催された。「調布」という市名をはじめ「布田」「染地」と布や染織にちなんだ地名が多いことから、布の作り手として第一人者である新井さんに白羽の矢が立ち、様々な催しがおこなわれた。

■展示
世界各地から収集された新井さんの民族衣装は、さながら染織の百科事典のように様々な技法や素材が網羅され、手仕事の美しさに加え、新井さんのコレクションに対する並々ならぬ情熱が見る者を圧倒した。また、それらに誘発された新井さんの作品からは、現代テキスタイルの先駆者としての軌跡をあらためて辿ることができた。エントランスホールには難燃繊維PPSを用いた作品「金剛界曼陀羅」が吹き抜ける空間で伸びやかに展示された。市内の甲州街道沿道には金銀の布によるフラッグが棚引き、市民による関連展示も行なわれた。

■公開制作・ワークショップ「渦」
布を紐状にねじりながら、直径7メートルの渦巻を設置する新井さんの代表作「渦」を参加者とともに公開制作。燃りをかけるという原始的な作業の連続が、何か神秘的な空間を醸し出す作品へと昇華し、参加者は引き込まれてゆく様子だった。

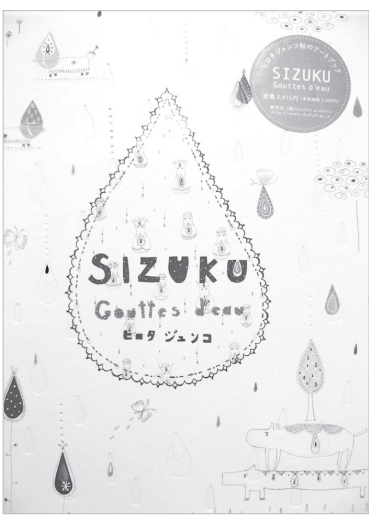
■ワークショップ「金属布の絞り染め」
アルミを真空蒸着させたスリットヤーンで織られた布を絞り、アルカリで金属部分を溶解し、透明感・立体感のある布を作る。これは新井さんの代表的な布のひとつ「メルトオフ」と同じ技法である。絞り染は世界各地に存在する伝統的な技法だが、現代のテクノロジーから生じた布と出会うことにより、とても魅力的な表情を見せた。

■スライド&トーク
テキスタイルをキーワードに縄文から未来、日本から世界へ、時間と空間を縦横無尽に往き來するお話であった。昭和13年世界再速・最長距離の記録を達成した国産航空機である「航研機」の翼にエジプト綿で織られた布が使われていたこと、ボーイング社の機体は軽量化に伴い炭素繊維が用いられ、近い将来車の車体にも使用されることが予測され、これらのテキスタイルは空飛ぶ絨毯のように暮らしの進化に貢献してきた。しかし技術の進歩は平和的に利用されるだけでなく、負の面と表裏一体である 危険性を伴っているというお話が、新井さんの平和を切望する思いとともに語られ印象深かった。最後にテキスタイルの可能性はまだまだ無限に広がるという言葉に、とても勇気づけらる思いがした。

各催しとも抽選が行われるほどの盛況だったが、調布市民優先で参加できる幸運に恵まれ、世界的に活躍される新井淳一さんを身近に感じられたことは、テキスタイルに関わる者として何事にも変え難い経験となった。

（原 すがね）

四季を感じるアートブック「SIZUKU ～Goutte d'eau～」
準会員 廣田純子さん スカイフィッシュグラフィックスから出版



どこからともなくやってきて 包み込んでくれるSIZUKU
まわりにはいつもいるんなSIZUKUが飛んでいて ふとした時に気づく。
あなたは今日どんなSIZUKUに出会いましたか？
この本を開く度に違うSIZUKUに出会ってほしい。 気づいてほしい。
そんな思いを込めて。 <http://www.hitane.com>

原画展予定		
1／7～21	静岡	cielo azul material
1／27～2／12	熊本	orange
2／25～3／9	仙台	カフェサンルウ
3／15～20	東京	吉祥寺 にじ画廊
3／29～4／15	大阪	ジュンク堂書店大阪本店
3／29～4／10	神戸	TORITON CAFE
4／20～5／6	名古屋	Cache 熱田店
6／6～24	長崎	ORENGE SPACE

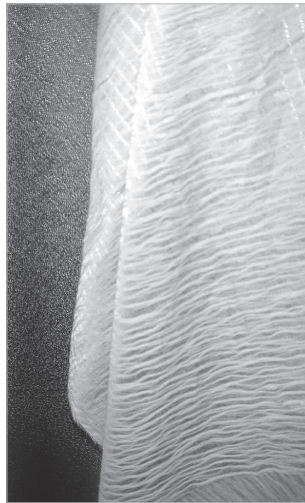
産地企業のデザインへの挑戦

準会員 梶原加奈子さん

産地企業が欧米輸出に乗り出すために、デザインを取り入れた商品開発に力を入れ始め、07/08秋冬向けから、尾州のいわなかと播州の丸萬商店が、テキスタイルデザイナーの梶原加奈子さんを起用し、9月のブルミエール・ヴィジョンのいわなかブースでコレクションを発表した。注目されたデザインは、丸編ジャガードのレイヤージャージーで、会場の最新デザインコーナーに飾られ、モード誌が次々と取材に訪れた。また、播州のクラッシュ加工にも関心が集まった。機械による織りなのに、手織りのような柔らかい雰囲気を作り出す新しい方法と評価された。



レイヤージャージー



クラッシュ

トップブランドのバイヤーからは、シルクウールや高密度のコットン100%の生地など、産地オリジナルの無地企画も人気が高く、展示会でサンプル発注を決めるバイヤーも少なくなかった。いわなかの岩田昌憲部長は、ビジネスはこれからだけどデザインの反応は予想以上だったと振り返り、デザイナーの梶原さんは、今後も各産地の持つ技術とデザインを融合し、世界に日本テキスタイルをアピールしたいと語った。